

■兵庫県の瀬戸内海の窒素濃度とカレイ、エビの漁獲量の推移



瀬戸内海の栄養不足解消へ

県、エビとナマコ種苗生産

兵庫県は2020年度、瀬戸内海の栄養不足を解消するため、エビやナマコの種苗（稚子）生産に乗り出す。それぞれの資源量の回復とともに、海中の有機物を稚子に分解させて、魚介の栄養分となる窒素の濃度を高める狙い。3年後をめどに本格放流する方針で、20年度は稚子の生産技術開発に着手する。

（山路 進）

20年度有機物の分解期待



県はナマコやエビの稚子を生産した上で、23年度にも県内瀬戸内海での放流の事業化を目指す。海底にたまった魚介のふん、死骸などの有機物を分解し、「栄養塩」の一つである窒素を発生させ、海中で不足する栄養を取り戻す。

県の外郭団体「ひょうご豊かな海づくり協会」に、稚子の生産技術の開発を委託する。有機物の分解能力が高いとみられるアジアカ

エビ、ナマコの2種を、同協会の津名事業場（淡路市）で増殖。採卵などを進めて、稚子を効率的に生産できるようにする。20年度は当初予算案に約620万円を計上した。それぞれ100万匹、5万匹を放流する。その後、漁業者団体に事業を引き継ぐという。

県は、瀬戸内海で高度成長期に深刻化した海水の汚濁を改善するため、赤潮の原因となる栄養塩の濃度上限値を設けた。しかし、栄養塩が減りすぎたことで海中のプランクトンや、それらを食べるイカナゴも減少。県水産課によると、県内の瀬戸内海ではイカナゴだけでなく、エビやカレイの漁獲量も過去30年で7割減少しているという。これを受けて県は昨年、独自に栄養塩濃度の下限値を設定。下水処理場の排水基準も緩和し、陸上からの栄養塩の供給量を増やしている。

県は稚子の放流を、水中で栄養塩を増やす取り組みとしても位置づけており、水陸両面から豊かな海の再生を目指す。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

挑戦してみよう！

記事の漢字、いくつ読めるかな？

① 瀬戸内海	<input type="text"/>	③ 有機物	<input type="text"/>	⑥ 外郭団体	<input type="text"/>
② 栄養不足解消	<input type="text"/>	④ 窒素	<input type="text"/>	⑦ 委託	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	⑤ 死骸	<input type="text"/>	⑧ 緩和	<input type="text"/>